

社会的貢献

広報誌 CiRA Newsletter で「倫理の窓から見た iPS 細胞」の連載を開始しました。一般市民や中高生を対象にした iPS 細胞研究の講演や、各種学校や医療機関における生命倫理の講義、マスコミを通じた情報発信等を積極的に行いました。



鈴木 美香 八代 嘉美 藤田 みさお 八田 太一 桑原 絵美
上廣特定研究員 上廣特定准教授 上廣特定准教授 上廣特定研究員 事務補佐員

京都大学 iPS細胞研究所

上廣倫理研究部門

2013年度研究実績報告書

Center for iPS Cell Research and Application,
Kyoto University
Uehiro Research Division for iPS Cell of Ethics



上廣倫理研究部門 ホームページ

当研究部門の詳細や最新情報は、ホームページをご覧ください。

<http://www.cira.kyoto-u.ac.jp/uehiro-ethics/>

京都大学 iPS 細胞研究所 上廣倫理研究部門

〒606-8305 京都市左京区吉田河原町 14 公益財団法人京都技術科学センター 3 号室
FAX:075-746-3329

(2014年4月30日発行)



所長あいさつ

2013年、京都大学 iPS 細胞研究所は公益財団法人上廣倫理財団からのご寄附を得て、新たに上廣倫理研究部門を設置することができました。この記念すべき年に、世界で初めて iPS 細胞を用いた臨床研究が、この日本で承認されました。医学・医療史の時代を画す重要な時に誕生した上廣倫理研究部門は、iPS 細胞研究に対する社会の問題意識を捉え、人々が抱く様々な疑問に答えるすべを探し続ける活動を目指します。7月の開設記念シンポジウムでは、先端的な幹細胞研究や倫理学・法学を専門とする若手研究者らと有意義な意見交換を行うことができ、また中高生をはじめとする次代を担う若者たちからも多数の参加が得られ、活発な質疑が行われました。さらに、その様子をインターネットで世界中に公開し、積極的な社会とのコミュニケーションを図りました。今後とも、こうした活動を通じ、私たちは iPS 細胞研究に関わる倫理の研究・教育・啓発活動に積極的に取り組み、国内外へ向けた情報発信を行ってまいります。



京都大学iPS細胞研究所
所長 山中 伸弥

部門紹介

iPS 細胞誕生の地ともいべき我が国では、iPS 細胞を用いた世界初の臨床研究を端緒に、臨床応用に向けた研究活動がいよいよ本格化する節目の時期を迎えています。iPS 細胞研究を迅速に進め、成功させるうえで重要な要素として、社会からの信頼は不可欠です。そのためには、研究の目的や方法が科学的・倫理的に妥当であることを確認したり、社会のニーズや意識の所在を正確に把握し、適切な対処策を検討・準備、提案したり、法令や指針に則った正当な手続きのもとで研究活動を行っていくことが求められます。

京都大学 iPS 細胞研究所上廣倫理研究部門は、こうした要請に応えるべく、公益財団法人上廣倫理財団のご寄附を得て2013年4月1日に開設されました。本部門の研究者は、アンケートやインタビュー等の調査・分析を通じて社会意識を把握し、対処策を提案していきます。また、新しい科学技術の医療応用について問題意識を高めるために、研究者や青少年も含めた一般の方々への教育活動にも取り組みます。さらに、iPS 細胞を用いた臨床研究等には欠かせない倫理審査等の手続きを含め、法令・指針の遵守に向けた活動へも参画しています。iPS 細胞を取り巻く倫理的・法的・社会的課題の解決に向けた積極的な取り組みを通じ、iPS 細胞研究に関する倫理研究の拠点としての役割を果たすことを理念としています。



2013年度主な活動

開設記念シンポジウム



上廣倫理研究部門の設立を記念し、2013年7月26日、京都大学百周年時計台記念館にて「iPS 細胞から考える生命（いのち）へのまなざし」と題するシンポジウムを開催しました。

周知期間がひと月程であったにもかかわらず、約400名の方にご参加いただきました。ご参加いただいた方は、研究者は70余名、高校生も含めた学生は90余名で、一般の方や研究者、学生という枠を問わず、当部門の開設が広く社会からの注目を集めていることが伺われました。

また、シンポジウムの様子は、Ustream にてライブ配信され、各種メディアにも取り上げられました。

研究活動実績

生命倫理上の課題の抽出と調査研究

次年度以降の本格的な調査に備え、本年度は主なヒト iPS 細胞の臨床応用における倫理的・社会的・法的課題について調べました。Journal of Medical Ethics 誌上における、再生医療を用いたエンハンスメント議論にも参加し、社会にいたずらな誤解を生まない、冷静な議論の必要性を呼びかけました。自由診療による幹細胞治療の問題点についても国際的な発信を行いました。

若手研究者・大学院生による勉強会の開催

(1) 京都大学内外の研究者や大学院生と、ヒト iPS 細胞研究をめぐる倫理的、法的、社会的課題に関する勉強会を開始しました。(2) 他大学の研究者や大学院生と多彩な倫理的、法的、社会的課題（小児医療、脳画像研究、がん医療、産業保健等）について共同研究する TV 会議を開催しています。2つの勉強会は、若手研究者や大学院生の研鑽、意見交換、人的ネットワークの構築も担っています。

Mixed Methods の導入

Mixed Methods と呼ばれる新しい調査手法について、重要テキストの訳出を行っています。

アウトリーチ、メディアを通じた情報発信等



八代嘉美 海猫沢めるん、
「死にたくないんですけど
iPS 細胞は死を克服できるのか」
ソフトバンククリエイティブ；
2013.

iPS 細胞を用いた再生医療が現実味を帯びる中で、さまざまな問題がみえてきています。被験者保護にはじまる先端医療に共通する問題だけでなく、iPS 細胞から生殖細胞を作り出すことや、立体的な臓器を構築する研究を行うために、動物細胞とヒト細胞を混合した胚（キメラ胚）をつくることの是非など、いわば「生命のすがた」を問いかけるような問題も見え隠れしています。こうした問題に対して、生命倫理という分野ではこれまでさまざまな哲学的な議論が行われてきました。これに加え、当プロジェクトでは、最新の幹細胞生物学の知見もこうした議論にフィードバックさせること、さらに、前記のような「生命のすがた」を問いかける作品が数多く創られてきたサイエンス・フィクション（SF）やマンガなどのポピュラーカルチャーを題材に、そこに現れる生命科学のすがたなど多角的に検討しています。そして、メディアを通じた情報発信などを通じて社会と協調しながら「生命のありかた」を考えていきます。

研究支援活動

当部門は、人を対象に行われる研究や、人の細胞を使って行う研究が、社会からの信頼に基づき実施されるよう支援する活動に参画しています。

2013年度は、CiRA における人を対象とする研究の支援をまず優先的に進めました。具体的には、CiRA 及び京都大学内で研究倫理の支援に携わる者を対象に、現場で求められる支援システムの構築として「研究倫理支援としてのワークショップ」を企画しました。このワークショップは、臨床研究実施に必要な倫理的・法的・社会的側面での知識やノウハウを共有し実践へ活かすことや、研究倫理支援の関係者間のネットワーク構築・強化を目指しています。

小冊子「幹細胞研究ってなんだ」の作成

iPS 細胞を含む幹細胞研究について、正しい理解に基づく一般市民と研究者との対話を促進させ、一般市民が幹細胞研究のもつ倫理的な課題について考えるきっかけを与える目的で、小冊子「幹細胞研究ってなんだ」の作成を手がけました。



Fujita M, Yashiro Y, Suzuki M.
J Med Ethics. 2013 Aug 28.



鈴木美香、
小冊子
「幹細胞研究ってなんだ」